

### 3. 大館禅雄ものがたり

#### <洞明院第10 第住職>

- ・ 大館禅雄さんは、洞明院第10 代目の住職である。
- ・ 平成12 年より大山山内の寺坊の中心である天台宗別格本山大山寺の住職となった。現在、洞明院と円流院の住職は息子に譲ったが、宝運院、禅智院、蓮浄院、寿福院の住職を兼務（二つ以上の寺院の住職を兼ねていること）している。
- ・ 洞明院は、江戸時代中期初代「禅澄」宝永6 年（1709 年）3 月13 日没によって開かれたという。江戸時代まで大山山内は、女人禁制であり、もちろん僧侶は婚姻ができなかった。各寺坊も血縁による世襲ではなく、弟子を育てて後継者とする事で寺坊が引き継がれていった。

#### ☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 寺坊にとっても大山寺繁栄のため弟子を育成することが山内の住職の勤めであった。弟子をたくさん持っている寺坊の発言力は自ずと大きくなった。
- ✓ 洞明院が江戸時代中期に設立されたというのも、修行を積み新しい住職となれるものがいると、以前にあった寺号を使った新たなお寺を造ったのではないだろうか。
- ・ 江戸時代は大山寺の寺で修行することは名誉なことであり親戚一同喜んだという。今でも島根県伯太から昔の住職の墓参りに来られる方がいるそうだ。
- ・ 大山寺には近在近郷から小僧さんが集まってきた。彼らは寺の後継者ではなく普通の子どもであったという。年端もいかない小僧さんにとって寺の生活は厳しいものであり、直ぐに帰った者もいたという。
- ・ 大山寺山内は女人禁制であり、参道の鳥居から先は女性が入ることはできなかった。しかし、各寺の離れに面会所があり、小僧さんとお母さんとの面会が許された。
- ・ 実際に洞明院も第8 代の「禅空（大正11 年8 月19 日没）」までは血縁関係はなく、その後血縁により引き継がれているようだ。

#### <大山寺のくらし>

- ・ 昭和2 年、大館禅雄氏は大山寺洞明院の住職の次男として生まれた。子どものころから大山に暮らしており、戦前からの大山寺の様子を良く知る一人である。

#### ☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 戦前の寺坊の生活は厳しく、営林署から炭を焼く許可をもらい炭焼きをして生計の足しにしていた。中ノ原から豪円山にかけて雑木林であった。豪円山の下にある体育館の辺りに炭焼き小屋があり、近くの雑木を切っては炭にして米子などに売りに行った。炭焼きで木がなくなったところでスキーをしていた。
- ✓ 雑木の炭は質が良く、特にミズナラが一番良質な炭となる。同じ雑木でもクリの炭は質が悪い、火をつけると“はぜる”のでこたつなどに入れると火事になってしまった。
- ✓ ミズナラの炭か、クリの炭か見分けが着けば一人前であった。

- ・ 大山での生活ではスキーは欠かせなかったという。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
  - ✓ 子どもの頃からスキーは好きだった。学校に上がるまでにスキーが出来るようならないと、学校に行ってから遊んでもらえなかったので、みんな必死に練習したものであった。円流院に祝原さんというおじいさんがいて教えてもらった。
  - ✓ 木のスキーを買ってもらっていたが、すぐ壊れるので直しながら使っていた。その日のうちに直しておかないと次に日に学校にも行けなかった。
- ・ 雪の深い大山では、冬になると地域の人が当番で道をあけた。地区毎に担当が決まっており、大館さんの地区は南光河原の担当であった。大変な作業であったがみんなが協力して作業していた。もちろん学校にもスキーで行っていた
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
  - ✓ 洞明院から南光河原を越えて分校までスキーを履いて通っていた。小さい子どもには大変な道のりであった。
  - ✓ 小学校の体育の時間は、1年生から6年生まですべてスキーであった。もちろん体育館などない時代、目の前にあった博労座のゲレンデが教室となった。
  - ✓ 学校が終わってからの遊びもすべてスキーであった。
- ☑ 伝承者 清水正憲氏：
  - ✓ 自分たちの頃も小学校にスキーで通っていた。
  - ✓ というよりもスキーでしか行けなかったと語る。
- ・ 清水さんは、昭和16年に大山寺観證院に生まれ現在は住職をしている。戦後の時代までスキーによる生活が続いていたようである。

#### <スキーが支えた戦後の大山>

- ・ 昭和22～24年頃から大山にスキー客が増え始めた。岡山、広島などから大学生がたくさんつめかけた。溝口の駅から歩いて大山にあがってきて、帰りは滑って降りていた。
- ☑ 伝承者 清水正憲氏：
  - ✓ 大山寺まで木炭バスが登り始めたのは、昭和26～27年のことであった。
  - ✓ しかし、真冬の1月～2月は雪が多く赤松までしかあがらなかった。雪が少なくなる3月になると大山寺の住民総出で雪かきをしたものであった。まだ舗装されていない旧道を赤松から博労座までの道をあける。各家からスコップを持ってみんなが手伝った。人が来ればお金になるのでみんな一生懸命であった。
- ・ まだ小学生であった伝承者であったが学校になんか行かなくても良いから雪かきをしなさいと言われていたという。

☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 戦後はスキーが大山を支えてくれた。雪が降れば、一年分の収入が入ってきた。
- ✓ 最初は列車のお客が多かったが、便利が悪くバスに変わっていった。当時、西鉄バスが九州各地からスキー客を運んできてくれた。西鉄の運転手たちは自分たちが大山のスキー場を支えているのだという自負を持っていた。立ち往生したときでも、少しでも苦情を言うと「我々のお陰でお客様が来ているのだ、バスを直せ」と反対に叱られたものであった。

☑ 伝承者 木田達二氏：

- ✓ 昭和 30～40 年代にかけてどんどんお客さんがきた。夜行列車福山号、銀嶺号などが運行しており、九州や岡山（福山）などからお客様を運んできた。
- ✓ 夜行列車は、朝早く米子駅に着く。バスで大山にあがると博労座に到着するのが朝 5 時頃になる。まだ真っ暗なので旅館の名前の付いた提灯を持って迎えに行った。

< 議員「大館禅雄」が手がけた三つの大仕事 >

- ・ 戦時中予科練習生として飛行機に乗っていた大館氏であったが、戦後まもなく大山に引き上げてきた。戦争時代のお話もたくさん聞いたがまた別の機会に紹介したい。
- ・ 大山寺で青年団活動を続けていたが、町議会議員に担ぎ出されたという。そして、初当選したのが昭和 30 年 11 月 28 才の時であった。
- ・ 当選してみたら同僚議員はみんな父親と同世代の人ばかりで、大変困ったことを覚えているという。
- ・ その時、大山寺の代表として立候補した公約が次の 3 つであった。
  - ✓ 道路舗装
  - ✓ 上水道の整備
  - ✓ スキー場のリフト設置 であった。
- ・ いずれも一筋縄ではいかないものばかりであった
- ・ 一期目の終わる昭和 34 年頃、県道の舗装工事が始まった。大山は国立公園ということもありいち早く着工の運びとなった。それも大山寺の方から麓の方へと舗装するものであり少し誇らしかったという。
- ・ それまで大山寺の飲料水は、南光河原から直接土管で水を引いていた。そのため大水が出るといつも壊れて村人が直していた。また、落ち葉などが溜まり、土管が詰まること がしばしばあった。
- ・ 簡易水道が広まり始めた頃であり、いち早く取り組んだのだが、大山には水源がなかった。地質学の先生にいろいろと相談したがいい知恵がでてこなかった。
- ・ そこで、金門の少し下の南光河原に大きな穴を開け、そこに溜まる水を水源とすることを思いついた。この方法がうまくいき大山寺初めての上水道となった。
- ・ 素人の知恵ではあったがこんなにうまく行くとは思わなかったと語る。

- ・ 一番苦労したのは、スキー場のリフトであった。大山寺から選出されている議員は、もちろん一人。観光事業に関心のある議員は他に一人もいなかった。
- ・ ましてやまだあまり知られていなかったリフトなどとてもない話であった。親子ほど離れた先輩議員に話してみても取り合ってもらえなかった。
- ・ 議案の上程まではこぎ着けたものの賛成 1 反対後全部で否決となった。その時は、さすがに辞任して帰ろうと思ったと語る。
- ・ 当時、町議会議長の田中義友さんが自分に任せろと言われたので、その言葉に従った。すると次の臨時議会に上程されたら議案が通過してしまった。初代の山根村長がやると決めた、議会が従ったのだ。

#### < 中ノ原スキー場の開発 >

- ・ それから本当の苦労が始まった。

##### ☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 信越のスキー場は何基かリフトがあったが、関西には神辺に木柱リフトがあっただけであった。業者の案内で箱根のゴンドラリフトや各地のスキー場を視察した。
- ✓ そして、本格的な着工を前に運転の責任者が必要となり、当時の産業課長渡辺さんと一緒に志賀高原で行われた技術講習会に参加した。難しい技術的なことは全く分からなかったので、居眠りばかりしていたことを覚えている。(笑う)

- ・ リフトの位置をどこにするかも大きな問題であった

##### ☑ 伝承者 大館禅雄氏：

- ✓ 当時、中ノ原スキー場のあった宝珠山は、戦時中に畑にしていた一部を除き一面雑木林であった。どこにリフトをつければいいのか皆目見当もつかない状況であった。
- ✓ そこで山崎<sup>きよ</sup>瑛子さんの人脈から猪谷千春選手の父親である猪谷邦雄さんを招いた。猪谷氏は竹竿を二本用意させ、役場の職員がその竹竿を持ち、一本は山の上に持って上がり、もう一本は山の下に持って降り、二人に高い木の上に登らせた。猪谷さんは真ん中にいて、右に行け、左に行けと指示を出していった。
- ✓ こうやってリフトの乗り場と終点が決まったのであるが、リフトが着くまではなぜそこにつけたのか分からなかった。リフトが着いてみて初めて絶妙の位置に着いていることが分かった。何でこんなに上手にリフトが付くのか不思議であった。

- ・ このようにして昭和 31 年中ノ原スキー場に大山で初めてのリフトがついた。ここから西日本のスキーのメッカといわれた大山のスキー場の歴史が始まることとなった。

- ・ こうして大山寺にとって大きな意味を持つ 3 つの事業が完成し、昭和 38 年大館さんは 2 期 8 年勤めた町議会議員を勇退した。
  - ✓ とにかく時期が良かったと、うれしそうに議員時代を振り返った。

< そのほかのスキー場開発 >

- ・ 上ノ原スキー場は、中ノ原スキー場のオープンの3年後にあたる昭和35年にできた。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
  - ✓ 大山町が開発した中ノ原スキー場の東側の松林がその場所であった。佐摩の元村長谷村さんの協力により、計画は順調に進んだ。時期を同じくして豪円山でもスキー場の計画が進んでいたため、同時に運輸省へ申請を出し、同じ年にオープンした。
- ・ 当時、地元の金融機関に勤務していた伝承者は、仕事が終わると大山に手伝いに上がっていた。開業前のスキー場に入ったときのことを良く覚えているという。
  - ✓ 背の丈ぐらいの熊笹をかき分けて山に登っていった。一番高いところまで上がると眼下が見渡せた。もどるときも道なき道を迷いながら降りていったという。
- ・ 国際スキー場は、昭和45年大山国体の開催される2年前にオープンしている。
  - ✓ 昭和40年頃 中ノ原と上ノ原スキー場のある宝珠山の東側の山を広島県三原の学校法人の経営者が買収していたようだが、開発されなかった。
  - ✓ その後、大山で国体を開催することが決まったが、会場がない。そこで当時、すでに土地の権利を買い取っていた日本交通が国際スキー場の開発に乗り出した。
- ・ 私(昭和39年生まれ)も小学校に上がる前から両親に連れられてスキーに行っていた。よく国際スキー場に来ていたが、今考えるとオープン間もないころであった。
- ・ 当時の国際スキー場は、とにかく人であふれていた。初心者のゲレンデは、ゲレンデの3分の1の辺までリフト待ちの列がつながっており、裕に1時間はリフトを待っていた。また、中級コースのパラダイスゲレンデは、リフト待ちの列が川床道に長くつながり、烏枢波摩明王像の前を越えて続いていた。
- ・ もちろんそのころは駐車場も少なく、仁王茶屋の駐車場の少し下から観光道路の路肩に駐車して歩いて大山寺まで上がったものであった。早く上がらないと良いところに車が止められないため、朝早くたたき起こされてスキーに行ったものである。
- ・ 昔は、大らかなもので帰りはスキーを着けたまま道路や路肩を滑って車のところまで降りていた、今考えると少し危ないような気がする。

< 悲願の大山国体 >

- ・ 昭和32年にリフトが付き近代的なスキー場への道を歩き始めた大山であるが、その頃の競争相手は兵庫県の神辺スキー場であった。客の数では負けていなかったが、昭和32年、昭和40年に2回の冬季国体の誘致に成功し、全国的な認知度を上げていた。
- ・ 冬季国体を開催すると、周辺の基盤の整備も同時に進むため、いつかは誘致しないと競争に負けてしまうという思いが大山にわき上がった。
- ・ 昭和47年大山スキー場の悲願であった大山冬季国体の開催にこぎ着けた。
- ☑ 伝承者 大館禅雄氏：
  - ✓ 長年、全日本で選手として、そして当時は役員として活躍されていた山崎<sup>きよ</sup>瑛子さんの力が大きかったと思う。

- ✓ 最初は国体なんかできると思っていなかった。草大会はやっているが、大きな大会は誰も経験がなかった。きちんとしたコースを作らなければならなかった、昭和45年国際スキー場が完成しなにかコースができあがった。
- ・ 大館氏は、当時アルペン部門の副委員長を勤めたという。とにかく雪がなかったことを覚えている。雪を集めようと思っても集めてくる雪がなかった。
- ・ たまたま環状道路に雪があり、自衛隊などの協力により運んできた。平たく伸ばしてしまうとすぐ解けてしまうので、大きな山にしてスキー場に置いておいた。
- ・ 開会式の前日から雪が降り出し、ほっと胸をなで下ろしたのもつかの間、大変な問題が起きた。積んであった雪山が凍ってしまったのだ。急いで大山農協から開墾用のクワを借りてきて、役員総出で山を崩した。
- ・ とにかく大変な作業であり、せっかく集めた雪も使わずに終わった。
- ・ 札幌オリンピックのすぐ後の開催であり、ジャンプで金メダルを取った笠谷選手などに注目が集まった。また、地元からもオリンピックに出場を果たした大杖さんなどに期待がかかったが結局、大杖さんは振るわなかった。
- ・ しかし、開会式で選手宣誓をした椎木喜久男さんが地元の声援に応え、大回転壮年の部2位、同じクラスに出場した宮本さんも8位となった。
- ☑ 伝承者 椎木喜久男氏：
  - ✓ 大山国体の時は雪不足で練習ができなかった。他の選手も雪不足で練習をしていなかったのだろう。選手といっても選手だけやっていればよかったわけではない。役員の仕事もあり、資材係としてトタンを運んだりしていた。
  - ✓ 大会当日も雪が降り、誰も滑ってないコースなので新雪がたまっていた。一番スタートであったので、滑っていると雪が向かってきた。
  - ✓ 一番目の選手のタイムを目標として後続の選手が滑ってくるのだが、北海道の芹沢という選手が自分より0.01秒早く優勝した。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
  - ✓ 資材係長として大会の運営に当たった。チャンピオンコースのゴールから翌日のスラロームのゴールであるリーゼンコースまでベニヤ板を運ばなければならなかった。スノーモービルにも乗らず歩いて運んだことを覚えている。
  - ✓ スタート地点で暖を採るため灯油缶と炭を運んだ。
- ・ これに続き大山スキー場では、平成5年に冬季国体が開催された。
- ・ 現在、全国に冬季国体が開催できる都道府県は14あるという。
- ☑ 伝承者 木田達二氏：
  - ✓ 平成20年の冬季国体の開催地がまだ決まっておらず、大山スキー場としては是非誘致したい。定期的に大きなイベントをやらないとお客様から忘れられてしまう。
  - ✓ 国体をする事になれば、大山のイメージアップにもなり、施設の整備も進む。選手の強化にもお金が掛けられ、選手たちにも目標を持たせることができると語った。